

# 音調句と日本語韻律構造

## Tonal Phrases in Japanese Prosodic Structure

児玉望

Kodama Nozomi

### はじめに

児玉(2005)では、鹿児島方言の二型アクセントのそれぞれの型のアクセント単位が東京方言とよく似た条件で分布する異なる実現形をもつことを示し、アクセント句より上位の韻律構造階層として、東京方言について川上泰氏が提唱したものと同様の「句」が認められることを示した。

このような見方に対する反応として、同じ現象をなぜ「フォーカス韻律論」で取り扱わないのか、というご意見をいただいたのは、予想外のことであった。拙稿の関心は、日本語および鹿児島方言の韻律構造の形式解釈にあり、フォーカス機能の音韻的实现としてどのようなものがあるかを記述することではなかったからである。イントネーションという、書記体系によって捉えられることもなく、ともすればパロールのな臨時的な実現と片付けられがちな現象に、ラングの一部として記述されるべき構造があるという事実を1950年代に指摘し、さらにこれを組み込んだ「動的音調観」という一貫した体系によってアクセントを記述する川上氏の一連の著作に触発された研究として、これは自明のことであった。

しかし、川上氏が「句」と名付けた韻律上の構造に関する最近の研究動向に注意を向けてみると、単に、同じ形と意味の対応を指して「韻律構造の違いによる弁別はフォーカスの解釈に関与することがある」というか「フォーカスは韻律( $F_0$ 値)に影響する」というかという記述スタイルの違い、としては片付けられない事実認識のずれも生じているようである。このようなずれが記述の方向性の違いと相俟って研究者の意思疎通の妨げになっているとしたら今後の韻律研究の進展にとって不幸なことである。そこで、本拙稿では、まず川上氏の「句」概念に関わる記述が、近年の内外の韻律研究でしばしば言及されているものとどのように対応しどの点で不一致があるのか、またどの点が単なる記述の方向性の違いでありどの点がより本質的な事実認識の差であるのかを整理することを試みる。特に、児玉(2005)では区別があるという事実以外はあまり踏み込むことをしなかった意味の領域についても、積極的に踏み込んで、句の統合がいかにか雑多な機能を表示しているかという観察を提示する。

その上で、川上氏の「句」が、東京方言アクセントの記述としてその音声的实现の観察

と音韻論的な解釈の両面でより妥当なのはもとより、純粹に音韻論上の実体として鹿児島方言やアクセントの型の区別のない熊本方言にも観察されかつ分析されうる、という拙論を補強するために、アクセントの実現形交替以外の「句」に関わると考えられる言語事実を上げ、今後の方言韻律構造研究を念頭に韻律構造階層についてあらためて考察する。

### §1. 「句」へのアプローチ

川上氏によるプロソディー記述に関わる音韻論上の構造や弁別特徴の中で、「フォーカス」に関わりそうなものとしては「句」と「プロミネンス」があげられる。前者についてまず昨今の研究動向との対応を述べ、次いで、看過されているのではないかと疑われる後者について、他の研究にとって含意するところを指摘する。

川上氏の「句」は、まず第一に「句切り」(川上 1961)によって定義された音声実体をもつまとまりであり、概念上の仮構物ではない。しかし、このままではより抽象化された論との比較が成り立たないため、「句切り」を中心とした句そのものの特徴についての議論は先に送り §4 で論じる。必ずしも「句」の存在を認めない立場と比較することも考慮し、近年の韻律理論で問題にされることの多いアクセント型の実現を中心に、川上氏の記述から読みとれることがらを以下 a-d の4点にまとめる。誤りや不正確な点、および川上氏本来の記述の含蓄と洞察が失われている点の責任はすべて筆者にある。

a. 語彙的に決定されたアクセント型が実現する最小の単位がアクセント単位であるが、この発話中での実現形の変異の中に、二項的な対立が仮定される方言がある。(T\*/!T\*)

a は、発話内での位置やイントネーションによるアクセント実現の変異の中には、言語の構造上決定されており言語記述の対象とされるべきものがある、ということである。この点ではこれらの記述を含む研究ではすでに基本的な合意があると考えられる。catathesis(あるいはdownstep)やdephrasingといったプロセスの結果として言語事実を記述する場合においても、その適用の有無は二項対立的である。川上氏の句音調論を直接アクセント単位実現形の二項対立に翻訳して示したのは上野(1984)であるが、句音調は当初からアクセント実現形に反映されるものとして記述されている。

b. これらは適当なアクセント単位の連鎖を取ることにより(「句切り」の有無によるとも解釈可能な) ミニマルペアとして観察することができる。(T\* !T\*)/(T\* T\*)

b は a のもっとも有力な論拠となると考えるが、このようなミニマルペアを正面から取り上げた研究は少ないように思われる。川上氏は意味への言及無しに東京方言でのこのようなミニマルペアを多く挙げており、どんな意味上の違いがあるかに関わらず母語話者として弁別可能な（共通した音韻特徴による）対立があることを主張する。郡(1997a-b)は、このようなミニマルペアによる対立が東京方言でどのように機能するかの論考であり、意味上区別が生じる場合を中心にしたミニマルペアの例が多い。これに対して、ミニマルペアを成す他の実現形の存在が予想されるのにその一方のデータだけを論拠とする研究も散見する。統計処理を用いる実験音声学的な研究のように、得られたデータがどちらかの形で一貫していることが決定的な意味をもつ場合には、データ収集の段階でこの点に関する顧慮がないことは致命的になりうるのではないかと危惧するのであるが<sup>1</sup>、にも関わらず方法としてこれが成り立ってしまうのは、プロセスタイプの記述を中心にみられる「無標／有標」の区別が関わっていると考えられる。有標な要因がない以上は無標形が現れているはずだ、という考え方である。これについては、フォーカスの取り扱いを中心に d で改めて論じる。

c. この二項対立は、東京方言ではアクセント単位頭からの弁別的に有意な上昇の有無として実現すると考えられる。

c については、Pierrehumbert & Beckman(1988)のプロソディー論をどのように扱うかで大きく分けられると言ってよいだろう。川上氏と同様に、すべてのアクセント単位について共通して「句頭からの上昇」の幅を問題にしているのは郡(1997a-b)で、「アクセントの強弱」と呼ぶ。「句音調」を直ちに用いないのは、どちらの形でも句頭の上昇自体はあることを考慮したものと考えられるが、川上(1957b)では「意図的な積極的な上昇」かどうかを問題にしているのであり、事実上同じと言ってよい。これに対して、H\*L というレジスターの変位として東京方言のアクセント核を捉え、これが後続するアクセント単位の核のピッチのピークを低める(!H\*L)とする Pierrehumbert & Beckman(1988)の catathesis 説では、無核アクセント単位に平板に後続する場合のようなピッチ低下のない場合が統一的に扱えない。相対的ピッチ上昇に着目する川上氏は、この場合の後続アクセント単位の冒頭のピッチ低下と引き続く回復があるかどうかの問題として、有核型の低下の後のピッチ回復の幅の大小と並行的に扱うのに対し、Pierrehumbert & Beckman (1988)では無型の後のみ適用されるアクセント句統合規則を別に設定する。このため、川上氏ならばともに「句」として分

析するであろう「ア]ニノヨコ]シタコヅ]ツミ」と「アネノクレタテガミ」が、前者は *catathesis* の適用範囲として定義される中間句 *intermediate phrase* を構成するのに対し、後者は中間句より下位のアクセント句 *accentual phrase*、という母語話者の目には奇妙に感じられる分析になる。にもかかわらず、生理的な要因による自然なピッチ下降(*declination*)より大幅な下降とされる *catathesis* が通言語的にみられる言語現象であるという主張には無視しがたいものがあるようである。

d. この二項対立をそれぞれ句境界形および非境界形とみなすことによっても、境界形から次の境界形に至る、アクセント単位より上位の階層の構造としての（音韻論上の）句が定義できる。東京方言の、句頭アクセント単位頭からの弁別的に有意な上昇は、句頭を示すマーカーとみることができ、川上氏はこれを句音調と呼ぶ。

このような「句」を設定するかどうかには、音韻論と統語論のインターフェースをどのように考えるか、あるいは、音韻構造の自律性をどのように考えるかという要因によってさまざまなアプローチがありうる。c で述べたように、Pierrehumbert & Beckman (1988)は韻律の階層構造として、中間句とアクセント句を含む4階層を立てる。統語論上の句階層とは必ずしも対応しない中間句層を、*catathesis* という音韻論上の言語事実を根拠に立てている点が特徴的であるが、これは中間句の概念が本来、統語論と一致しないことが自明とされる英語のイントネーション句の下位階層として立てられたものに由来するからである。同じような音韻構造の階層を、ベンガル語の分析をもとに提案する Hayes & Lahiri(1991)は、「中間句」を立てないが、アクセント句が左端の低い強勢音節 L\*で定義されるベンガル語ではそもそも *catathesis* がありえないことと、統語構造とのインターフェースを重視する生成文法的な意味での音韻理論との整合を主張しているからであろう。Hayes & Lahiriの分析では、基本的に統語構造上の句に対応する部分を対象とした「フォーカス」が扱われている。

プロセスの考え方に立つ記述では、a のような二項対立を一方から他方への派生プロセスの産物として派生する、という方法で「句」を積極的に立てずに事実上同じことを言うこともできる。この場合、一方を無標とし、他方が派生する条件を特定する、という形の記述になる。郡(1997b)の「アクセントの弱められる場合」は、限定修飾を受ける場合、直前の語と一体化した並列、そしてフォーカスのある語に後続する場合が挙げられる。一方、フォーカスのある語はアクセントが強められる場合もあるとしているが、この強めは「義

務的ではない」ので、フォーカスがあることを認めるにはまず「フォーカスのない後続の語があればこのアクセントが弱められている」ということが必要条件となる。アクセントの弱化をさまたげる郡(1997a)の「副フォーカス」が郡(1997b)でこの表現にまとめられたのは、アクセントの弱めを有標とする記述の一貫性を考慮したからではないかと考える。郡氏のフォーカス記述の分類は多岐にわたっており興味深い例文も多いが、ややもすると前記の条件が必要十分条件なのではないかと錯覚してしまうところがある。

これに対して、Pierrehumbert & Beckman は *catathesis* によるピッチ下降が有核アクセント単位に後続する場合のデフォルトであるとする。*catathesis* がブロックされ、 $F_0$  が回復して新たな中間句が開始されるためには何らかの条件が必要となる。たとえば、フォーカスはそのような中間句分割を引き起こす条件の一つとして挙げられる。ただし、ほかにどのような場合に中間句が分割されるのかは明らかでない。窪菌(1997)は、有核語に後続する場合の *catathesis* だけでなく、無核語のあとの「イントネーション句融合規則」も無標で適用されるプロセスであるとみる。これが適用されないのは「特定の語が強調されるといった特殊な場合」とし、また、3個の要素から成る統語構造では「有標」な右枝分かれ構造の上位の分枝において *catathesis* やイントネーション句融合が「阻止されやすい」とする。しかし、左枝分かれ構造でも{ハナノナガイ}{ゾー}のように *catathesis* が阻止されうることを考慮すれば、単に枝分かれ構造で分割が起きるとすれば上位の分枝からであるとするのが穏当であろう。

{バート}ーベンノ}{ウ]ンメーノロクオン}や{リコンシタタ]ロート}{ハ]ナコ}のように、枝分かれ構造の下位で分割が起き、上位では起きない場合については、分割と「アクセントの弱め」のどちらを有標とみなす立場であってもそのプロセスにもう少し説明が必要だと思われる。このような例は、句の分割・融合が統語構造全体と対応するのではなくむしろ局所的な条件で決定されていることを示しているといえるだろう。

どちらを無標とみなす場合でも、有標な語形が現れる条件としてフォーカスが取り上げられていることは興味深い。しかし、音韻論に限らずフォーカスについて論じる場合の困難は、フォーカスにさまざまな種類があること、および、フォーカスが（意味的あるいは音韻的に）際立たせる単位は必ずしも「語」ではなく、語の連続や一部でもありうるという点である。たとえば、「むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日のことおじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に出かけました。」という発話には、新情報と対比（並置）のフォーカスが二重に認められる。これらのどのフォーカスがどのようにアクセントの実現に関わっているかを明らかにするためにはもう

少し精密な議論が必要なように思われる。確実にいえることは、句頭形で発音しないのが自然と考えられる「ところに」「いました」「日の」「こと」が、これらの部分だけにかかるフォーカスをどんなものであれ受けていない、ということだけではないだろうか。

川上氏は、句の統合・分割を単に二項対立として挙げているだけで、どちらが有標であるかについては論じない。音韻の点に関しては、単独で現れる、句音調を伴う形が有標で、こちらを無標として有標な「アクセントの弱化」や *catathesis* によるピッチ下降を想定する考え方と対立するようにも見えるが、これは見かけ上のことである。句音調論は、単独の語形であれ単独で発音できる以上やはり「句」だ、ということなのであり、語単独の発話で句音調を伴わない語形が現れたとしたら有標ということになるだろう。意味の有標性については、そもそも「音調句」や「句音調」の意味との関わりについてまったく触れない以上、問題にならない。句音調とフォーカスの関わりについての言及もない。しかし、川上氏（川上(1957a)）の「プロミネンス」は、フォーカスのうちの対比強調的フォーカス機能を実現することがありうる音韻上の手段として<sup>2</sup>記述されており、これが句音調と重なりをもつ。句音調にプロミネンスが加わる場合には、いわば、発話中に現れる句音調の中で有標なものということになる。通常はピッチ上昇（幅）によって際立てられるプロミネンスはその実現において句音調と同じであるように見えるが、川上氏は、プロミネンスが連辞関係の中での際立てであることを強調しており、句音調（句切り）の有無のように範列的体系の中で選択されるものとは明確に区別される概念である。つまり、川上氏によれば句音調にはプロミネンスの加わったものとそうでないものがあるのであり、句音調による（対比強調）フォーカス表示を論じるとすれば、この区分にも言及しなければならないはずである。句音調のフォーカス表示機能についての最近の論考では、郡氏の（随意的とする）「アクセントの強め」のほかは、解釈レベルで句音調による上昇とプロミネンスによる上昇を意識して区別しているものが見当たらない。この点がもっとも目に付く事実認識のズレではないかと考える。

川上氏の「プロミネンス」がわかりにくいひとつの理由は、「プロミネンス」が「句」や「アクセント単位」の「部分」に対しても加わりうる、という点である。語の連続や語の一部にも加わりうる対比強調フォーカスの表示機能の担い手として、この性質があると想定することは理解できるのであるが、句頭以外の位置に現れる句音調と同様のピッチ上昇が、新たな句の句音調や、あるいは川上氏が遅上がり句音調と呼ぶ上昇の遅延とどのように区別されるのかは必ずしも明確ではない。また、挙げられている例に多い句末位置は、句末イントネーションによるピッチ変動が起りやすい場所とも重なる。ピッチ変動がさ

まざまな機能を果たしている日本語の場合、むしろピッチ変動によるプロミネンス表示に何らかの制約が加わっていると考えるほうが自然であり、プロミネンス表示ができない位置を調べてみることに意味がありそうである。たとえば、川上氏が東京方言の例としてあげている句頭以外の位置のプロミネンスは、鹿児島方言ではピッチによって表現することが不可能ではないかと思われるものが多い。鹿児島方言の場合、句音調の位置が唯一のプロミネンス付与可能な位置であり、したがって、句の（句頭アクセント単位を欠く）部分に対する対比強調フォーカスを韻律的手段で表示することはできないという仮説を立ててこれを検討してみる余地もあるだろう。東京方言についても、句音調に重なるプロミネンスとそれ以外のプロミネンスを区分して考えることが有効ではないだろうか。

川上氏の記述全体を通して一貫しているのは、「句」であれ「プロミネンス」であれ音韻構造上定義される概念であってあくまで音韻上の言語事実を通じてその体系を明らかにしようという姿勢である。能記は所期とは独立した構造性をもっており、二つの構造が直接に対応しているわけではない。異なる意味を表わすのに同じ音素が用いられうるのと同様、韻律特徴についても同じものが異なる統語構造の表示に用いられることがありうる。統語構造やフォーカスのような談話機能がどのような韻律的特徴によって実現するかを記述する前提として、まず韻律特徴の構造全体が明らかになっていなければならない。その点で、母語話者でもある川上氏の東京方言韻律記述の重要性ははかり知れないと考える。

以上のような筆者の理解を具体的に示すために、東京方言における対比強調フォーカスと句への統合・分割の関与に関する分析例と、句の統合を用いて示されると考えるさまざまな意味的あるいは特殊な統語的構造の分析例を以下の2章で提示する。なるべく児玉(2005)で扱わなかったものを中心とする。本拙稿では東京方言の例を中心とし"J"でピッチ下降位置を示すが、特に断りがない限り鹿児島方言でも共通に観察される事柄である。音調句を{}で囲み、その冒頭に加わる句音調の表記は省略する。句音調の高低を表記するよりは「句」を表記するほうが直観的にわかりやすいと考えたからである。この予想が正しいとすれば、句は具体的な実在であるとする川上氏の記述を支持する事実である。

## § 2 対比強調フォーカスとプロミネンス

児玉(2005)で挙げたように、二桁以上（21以上）の数詞は、しばしば二句に分割される構文論上の語のひとつである。これに対して、二句に分割されない構造が、文脈によっては句の前分のみに対する対比強調フォーカスを担うようにみえる場合がある。1bは、単に後分の句音調を消去しただけで前分への対比強調フォーカスが加わっているように見える。これに対して、二句のままで前分あるいは後分だけに対比強調フォーカスを加えたい場合

には、それぞれの句にプロミネンスを加えてピッチのピークを他方より上げてやらなければならない。「プロミネンス」がもつ「連辞の中での卓立」という性質による。1b は、1b' の後分のピッチのピークをじゅうぶん下げたことにより近傍のピッチのピークが消え、それほどピッチをあげなくても数詞前分が卓立している場合、というように考えることができる。

(1) a. {サ]ンジュー}{ハチ]ンデ]ス} 「38 人です」

b. (48 人じゃなくて) {サ]ンジューハチ]ンデ]ス}

b'. (48 人じゃなくて) {サ]ンジュー}{ハチ]ンデ]ス}

c. (36 人じゃなくて) {サ]ンジュー}{ハチ]ンデ]ス}

単に一句にすることで前部にフォーカス加わるのではないことは、2b で特に「30」へのフォーカスが感じられないことから明らかである。この例では、句音調にプロミネンスを加えても、後分の句に対する際立として、むしろ前分の年齢の句全体が際立つ効果をもつ。2a の構造の最初の成分にプロミネンスを加えるほうが「30」への対比フォーカスがはっきりする。

(2) a. {サ]ンジュー}{ハ]ッサイ}{ドクシンノダンセー} 「38 歳独身の男性」

b. {サ]ンジューハ]ッサイ}{ドクシンノダンセー}

前分が無核の組み合わせでは、前分へのプロミネンスは、冒頭でピッチを大きく下げ、引き続き急速に回復でのピッチ上昇の幅を際立たせることによって実現する。この場合でも、後分の冒頭のピッチ上昇をじゅうぶん小さくして、句境界を消去できる。

(3) a. {ゴ]ジュー}{イ]チ]ンデ]ス} 「51 人です」

b. (41 人じゃなくて) {ゴ]ジューイ]チ]ンデ]ス}

b'. (41 人じゃなくて) {ゴ]ジュー}{イ]チ]ンデ]ス}

c. (53 人じゃなくて) {ゴ]ジュー}{イ]チ]ンデ]ス}

以上のような観察から、対比強調フォーカスの実現には主として句へのプロミネンス付与が関わっており、基本的にはその句全体がフォーカスの対象となるが、前分にプロミネンスがある場合には後続のプロミネンスのない句が句音調を失うことがありうる、という仮説を立て、次のように図式化する。

<図 1 >

- ・前分にフォーカス {P}{ } → {(P)| }
- ・後分にフォーカス { }{P}
- ・全体にフォーカス {P | }



・全体にフォーカス \*{P}{P} → { }{ }

P: プロミネンス (隣接できない) | : アクセント単位境界

1b と 3b での句の統合はプロミネンス実現に随伴する二次的なものとみなす。2b では句への統合がほかの要因起きており、この句にプロミネンスを付与すると句全体への対比強調フォーカスとなっていると考える。結果として、句に統合した場合の句音調へのプロミネンス付与は、前分のフォーカス実現とこの句全体へのフォーカス実現の二つの機能を兼ねることになる。後分へのフォーカス実現の必要条件は、句として独立していることである。

川上氏のプロミネンス付与は、句の統合と関わりなくアクセント単位の部分への対比フォーカスを実現する場合がある。東京方言では二桁の数詞を4モーラの定型的な1アクセント単位で表現する方法を二種類持っている。一つは電話番号の読み上げに現れる次末核固定の4モーラ、もうひとつは桁数の大きい数の上位二桁だけを表現する場合などの無核4モーラである。このうち、次末核型ではこの次末核音節にのみプロミネンスを加えることで、4aのように後分のみへの対比強調フォーカスを表示できる。しかし、前分のみに対比強調フォーカスを置くことは難しい。句音調にプロミネンスを加える4bは、句全体への対比フォーカスと区別がつかない。二句に分割して一方にのみプロミネンスを付与するためには、複合語ではなく一桁の数詞の連続にしなければならない。

(4) a. (36 じゃなくて) {サンハ]チデ]ス}

b. (28 じゃなくて) {サンハ]チデ]ス}

c. (28 じゃなくて) ?{サン}{ハチ]デ]ス}

一方、無核4モーラでは5a、5bが共に同じ形になり、部分のみへのプロミネンス付与は前分・後分ともに不可能である。このことは東京方言において句の冒頭を含まない部分へのプロミネンス付与の可能性がその部分に核が存在するかどうかによって条件付けられていることを予想させる。

(5) a. (36 じゃなくて) {サンハチデ]ス}

b. (28 じゃなくて) {サンハチデ]ス}

鹿児島方言の場合、この配列の複合語は定型ではなく原則として通常の複合語規則に従う4モーラ配列となるが、部分のみへの対比フォーカスはできず、前分・後分とも4cタイプの複合語分割が必要になる。

数詞のような二句に分かれうる語で述べた句のプロミネンスとフォーカス表示の間の対

応は、連語の場合にも観察される。6b と 6c は、ともに連語が句に統合して句音調にプロミネンスが加わっている場合で、音調上の区別はないが、フォーカスは 6b では前分、6c では全体となる。6c は、「背の高い人」全体にフォーカスがあり、この場合は一つの句にまとまるほうが自然である。連語後分にフォーカスを置くためには、この部分に句音調がなければならない。

- (6) a. {セ]ノ({})タカ]イヒト]ナラ}{ダレデモイ]ー}  
 b. (学歴や年収じゃなくて) {セ]ノタカ]イヒト]ガイ]ー}  
 b'. (学歴や年収じゃなくて) {セ]ノ}{タカ]イヒト]ガイ]ー}  
 c. {コノ}{セ]ノタカ]イヒト]}{ダ]レ}  
 d. {モ]ット}{セ]ノ}{タカ]イヒト]ガイ]ー}

連語の前分が無核の場合でも同様の現象が観察されるが、この場合、句音調へのプロミネンス付与は句頭の開始ピッチの低下とそれに続く急なピッチ回復となる。

- (7) a. {カオノ({})イ]ーヒト]ナラ}{ダレデモイ]ー}  
 b. (頭より) {カオノイ]ーヒト]ガイ]ー}

以上、プロミネンスが加わった句音調の機能として、この句全体またはその冒頭のアクセント単位に対比強調フォーカスを表示する場合について簡単にまとめた。要は、ある部分に対比強調のフォーカスを置くための必要条件は、この部分が句であるかあるいはその部分であり、かつそこにプロミネンスを加えるべき句音調がなければならない、ということである。これは、全体にフォーカスを置くための句への統合が起こりうることを予測させる。結果は、前分にフォーカスを置いたために生じた句と必ずしも音声的に区別できないものとなる。関連する可能性がある現象として、熊本方言や鹿児島県出水方言など九州のいくつかの方言で、全体としてフォーカスを受ける句で内部のアクセント句境界がすべて削除されて全体としてひとつのアクセント句に統合することがあることも指摘しておく。たとえば出水方言<sup>3</sup>では、後分へのフォーカスが二句構造{セノ]}{タッカ]}、前分へのフォーカスが句への統合{セノ]タッカ]}、全体へのフォーカスがアクセント句への融合{セノタッカ]}という構造で、それぞれの句音調へのプロミネンス付与により、表示されることになる。

ただし、プロミネンスの置かれていない場合にも句への統合は起きる。この場合については、「フォーカス」ではない、それぞれ別の説明が必要である。

### § 3 句構成による意味の弁別

句への統合に、構文条件が関与していることは、窪菌(1997)など先行研究でも示唆され

ている通りである。語の内部構造のレベルから文のレベルにまでわたるさまざまなものを包含するとはいえ、プロミネンスによる対比強調フォーカスで中断されない句は、構成素間のなんらかの緊密な関係を含意する。これに対して郡(1997a)は、同じ語配列でもアクセントの弱化の有無によって意味が変わる例を挙げ、統語関係よりは意味的な限定関係が要因である、とする。一方、このような意味の違いが統語関係に由来する可能性があるとするれば、音韻論の側から韻律構造の違いを根拠として構文上の構造差があるのだと主張することもできそうである。ここでは、韻律構造による意味の違いがある場合の中で、少なくとも表層レベルでは統語的なふるまいに差がみられる例をあげる。対比強調フォーカスのみの問題として説明することは困難で、郡氏の分析ではおそらく「限定修飾関係」に一括されうると思われる句の統合のケースであるが、個々の例をみるとかなりレベルの違いも含む。

- (8) a. {アシタ]ワ}{ハ]ヤクオイデ} 「明日は早くおいで」  
 b. {ウルトラ]マンワ}{モ]ットツヨ]イ} 「ウルトラマンはもっと強い」  
 c. {マ]ダヨ]ンデル]ンダ} 「まだ読んでるんだ」  
 d. {モ]ー]オシマイダ} 「もうおしまいだ」
- (9) a. {ハ]ヤク}{オイデ} 「早くおいで」  
 b. {ウルトラ]マンワ}{モ]ット}{ツヨ]イ} 「ウルトラマンはもっと強い」  
 c. {マ]ダ}{ヨ]ンデル]ンダ} 「まだ読んでるんだ」  
 d. {モ]ー}{オシマイダ} 「もうおしまいだ」

統合する句の構成素は、8a は通常の連用修飾句（副詞）による限定修飾関係、8b は形容詞の比較級限定構文の一種、8c と 8d は状態陳述の述語を修飾して、先行する状態変化の有無に関して限定する修飾語であるが、8d では述語自体に状態変化が含意されており、限定というよりはむしろ事態の時間的推移に関する話し手の評価のみを表現する構文というべきであろう。8c もこの用法と解釈できる場合がある。これに対して、句が分割されている 9a-d は、先行成分に 8a-d の二項関係の表示にとどまらない、単独での意味があるように思われる。9a-d は二項を倒置することができ、倒置した結果として二項の間のプロミネンスに若干の差が出る可能性はあるものの、全体としての意味はほとんど変わらない。しかし、8a-d のような意味では倒置はできない。

- (10) a. {オイデ}{ハ]ヤク}  
 b. {ウルトラ]マンワ}{ツヨ]イ}{モ]ット}  
 c. {ヨ]ンデル]ンダ}{マ]ダ}

d. {オシマイダ}{モ一}

10a-d の二項の間には終助詞などのイントネーション成分を加えたりポーズを挟んだりすることもできる。また、これらの語は単独で現れると 9a-d のような二項関係の存在を予期させる。これに対して、8a-d のような解釈は二項の両方がそろわないと成立しない。つまり、8a-d の句は、語順が固定して隣接する必須の二項から構成されているのに対し、9a-d ではそうではない、という共通の特徴があるとみることができる。

しかし、共通点はここまでであり、個々の句の統合／分割のペアはそれぞれ異なる関係にある。9a のように「早く」が、必ず単独の句として現れる用法は、命令・依頼・願望といった話し手のモダリティーを表現する文に限られる。

- (11) a. {ハ}ヤク}{ニエナイ}=カナ 「早く煮えないかな」  
 cf. {モ}ット}{ハ}ヤクニエナイ}=カナ 「もっと早く煮えないかな」  
 b. {ハ}ヤク}{カ]エッテホシイ} 「早く帰ってほしい」

これに対して、8c-d のタイプの主観的評価を表わす構文の「もう」「まだ」は、事態を描写する陳述文か修辭的な疑問文に出現が限られ、命令文や疑問文に現れない。

- (12) a. {ダ]レカ}{マ]ダ}{ノコ]ッテル} 「誰かまだ残ってる？」  
 b. {モ一}{カ]エッテホシイ} 「もう帰ってほしい」

「もっと」に修飾される用言の中には、句への統合を許さないものもある。

- (13) a. {ウルトラ]マンワ}{モ]ット}{マシダ} 「ウルトラマンはもっとました」  
 b. {モ]ット}{ベツノヤリカタ} 「もっと別のやりかた」

いずれも 8a-d と 9a-d が異なる統語関係をもつことを示唆する事実であろうが、その関係は平行的ではない。

副詞「また」も後続のアクセント単位と句を構成するかどうかの意味に関与する。構成する場合、この句は一種のスコープを形成しているように見える。14a は、過去にインドに行ったことを含意するが、14b での含意は、さらにインドに行ったのが夏であることも特定する。これに対して、句が副詞のあとで切れている 14c は、14a と同じ状況の場合もありうるが、14a では不自然な「今年の出張は初めて行くところばかりだ」に続く文脈でも可能である。つまり、過去にインドに行ったことを必ずしも含意しない。「また」を累加の副詞と呼ぶとすれば、累加される内容を示す文をスコープあるいは補語としてとるような二項関係を成す場合に、句への統合が用いられる、とみることができる。

- (14) a. {ナツ]ニ}{マタイ]ンドニイク} 「夏にまたインドに行く」

b. {マタナツ]ニイ]ンドニイク} 「また夏にインドに行く」

c. {ナツ]ニマタ}{イ]ンドニイク} 「夏にまたインドに行く」

このスコープは、他の、スコープをもつ文法的成分のそれと比べてかなり強力である。

15a-b は、副詞が助動詞のスコープの外に出る解釈が可能であり文脈の支えがなければこちらが普通だと考えられるが、16a-b では助動詞のスコープ内であるとする解釈が自然であり主語がインドにすでに一回以上行っていることを含意する。

(15) a. {マタイ]ンドニイクコト]ガデキ]ナイ} 「またインドに行くことができない」

b. {マタイ]ンドニイキタクナ]ツタ} 「またインドに行きたくなった」

(16) a. {マタイ]ンドニイクコト]ガ}{デキ]ナイ} 「またインドに行くことができない」

b. {マタイ]ンドニ}{イキタクナ]ツタ} 「またインドに行きたくなった」

「また」は、16a,17b のように補文化している場合を除けば一般に否定述語のスコープの外にあり、つねに否定のスコープ内に現れる「二度と」「またと」「金輪際」などと相補的な関係にある。後者の副詞も「また」と同様にスコープをもつ句を構成するが、ただし否定動詞を分割した二句構造を構成することもできる。

(17) a. {コトシモ}{マタイ]ンドニイカナイ} 「今年もまたインドに行かない」

b. {マタイ]ンドニイツタ]リ}{シナイ} 「またインドに行ったりしない」

c. {モ一}{ニド]トイ]ンドニ({})イカナイ} 「もう二度とインドに行かない」

副詞「また」とよく似たスコープをもつのが、副助詞「も」に終わるアクセント単位を先頭とする句である。18a は太郎以外に誰かがインドに行くことを、18b では太郎以外の誰かが夏にインドに行くことを含意するのに対し、句が分割されている 18c ではこの含意はなく、たとえば知人の来年の旅行が話題になっている場合でも用いられうる。「～も」が否定のスコープに入り累加が否定されるときには対照の「～は」が用いられる。

(18) a. {ナツ]ニ}{タ]ローモイ]ンドニイク} 「夏に太郎もインドに行く」

b. {タ]ローモナツ]ニイ]ンドニイク} 「太郎も夏にインドに行く」

c. {タ]ローモ}{ナツ]ニ}{イ]ンドニイク} 「太郎も夏にインドに行く」

(19) a. {タ]ローモイ]ンドニイカナイ} 「太郎もインドに行かない」

b. {タ]ローワイ]ンドニ({})イカナイ} 「太郎はインドに行かない」

副助詞「でも」「まで」もスコープを明示する場合には同様な句を形成する。また、「～とも」「～ずつ」などの数量詞も同様のスコープをもつことがあり、量化詞句というように一般化できると考えられ、論理的な意味構造の音韻表示に句への統合が関与していることを示している。

- (20) a. {サ]ルデモイ]ンドニイケル} 「猿でもインドに行ける」  
 b. {タ]ローマデイ]ンドニイケナイ} 「太郎までインドに行けない」

これに対して、14c の「ナ]ツニマタ」(夏にまた) のような句は、単に隣接する二つの句が臨時に統合しているだけのようにも見える。しかし、この場合も、論理的な機能に関わっている可能性がある。21d は「夏に」が副詞「また」のスコープに入っており、夏に以前、インドに行くことと比べうる何かがあったことを含意しているのに対し、21c では夏にがこの副詞のスコープにないことが明示されている。21a と 21b では、可能な読みの解釈のひとつとして 21d と同じ含意がありうるが、21c ではそうではない。

- (21) a. {ナツ]ニ}{マタ}{イ]ンドニイク} 「夏にまたインドに行く」  
 b. {マタ}{ナツ]ニ}{イ]ンドニイク} 「また夏にインドに行く」  
 c. {ナツ]ニマタ}{イ]ンドニイク} 「夏にまたインドに行く」  
 d. {マタナツ]ニ}{イ]ンドニイク} 「また夏にインドに行く」

「また」は、主観評価の「まだ」の構文と異なり、必ずしも「また」が先頭になければならないわけではなく、「夏にまた」も「また」と同様のスコープの読みをもつ句を導く。この場合、22a、22b で「夏に」は累加のスコープの外にあり、前にインドに(あるいは船でインドに)行ったのは「夏」ではないことが含意されている。結果として、22a-b は 23a-b と非常に似た意味になる。言い換えれば、「夏にまた」における二項関係は、「夏にも」の「夏に」と「も」の二項関係と類似しているのである。

- (22) a. {ナツ]ニマタイ]ンドニイク} 「夏にまたインドに行く」  
 b. {ナツ]ニマタフ]ネデイ]ンドニイク} 「夏にまた船でインドに行く」  
 (23) a. {ナツ]ニモイ]ンドニイク} 「夏にもインドに行く」  
 b. {ナツ]ニモフ]ネデイ]ンドニイク} 「夏にも船でインドに行く」

助詞である「も」は常に先行する句を必要とするが、自立語である「また」も同様の副助詞的用法をもっている、ということになる。音韻レベルで緊密に統合する二つの要素の文法的関係が緩やかである、という点で、一種のクリティック化であるとみなすこともできるだろう。

「また」は、主観表明の用法ももつが、この用法でもクリティック的に疑問詞句や副詞などに接続して句に統合する用法があらわれる。意味の違いよりは句の構成への関与が目をはく用法である。副詞「よく」の主観表明用法や疑問詞句はプロミネンスが加わりやすい語でありその結果後続する句の句音調が消えやすい。「また」がこの位置にはいり、一旦句を結んで、ピッチを立て直しているように見える。さらに、この「また」は、強調要素

でありながら自身ではなく後続の語の句音調にプロミネンスが加わることを予期しているようにも見える。

- (24) a. {マタ}{ヨ]クソンナコト]ガ} 「またよくそんなことが・・・」  
b. {ヨ]クマタ}{ソンナコト]ガ} 「よくまたそんなことが・・・」  
(25) a. {マタ}{ド]コデソンナモノ]オ} 「またどこでそんなものを・・・」  
b. {ド]コデマタ}{ソンナモノ]オ} 「どこでまたそんなものを・・・」  
(26) a. {マタ}{コレガ}{ウマ]インダ} 「またこれがうまいんだ」  
b. {コレガマタ}{ウマ]インダ} 「これがまたうまいんだ」

同様の「句切り」要素として、挿入された語が前の句へ統合し一旦句を切る場合の用例は、川上(1957a)にも見える。

{ワタシノアレハ}{アネデ]スヨ} 「私の、あれは、姉ですよ」

これは倒置の例であり、文の要素が通常の話順から逸脱した場所にありそのことを音韻論的手段で表わさなければならない場合であるが、典型的には比較的構文関係への関与が少なく自由な位置を取りやすい語がこのような句切りのための句統合を構成すると考えられる。呼びかけ語（人名や二人称代名詞）もそのような「句切り」の有力な候補である。句切りのある 27b では、アナ]タは呼びかけ語と認められ、空いている主語の解釈は文脈に依存するが、この句切りがない 27c では文の主語と解釈されやすいように感じられる。

- (27) a. {イ]ツアナ]タ}{ワタシガ}{ソンナコ]トイイマ]シタ}  
b. {イ]ツアナ]タ}{ソンナコ]トイイマ]シタ}  
c. {イ]ツアナ]タソンナコ]トイイマ]シタ}

これらの句切り用法では、句への統合が構文や意味の関係表示というよりはむしろ、句の境界の明示という純粋に音韻論上の機能を担っているように見える。しかし、この章で取り上げた他の雑多な句の統合例も、共通点はおそらく二項関係を隣接と順序の固定によって表示するという点だけであって、句が本質的には音韻構造上の隣接／分離の区別を保証する階層の一つであることを示している。このことは、句がアクセントのピッチ実現の交替にとどまらない他の音声の特徴によっても定義付けられる実体をもっていることを予想させる。

#### § 4 韻律構造階層としての音調句

川上(1961)は、「言葉の切れ目」の第一の分類として「音調的切れ目」をあげ、さらに息の切れ目（呼吸停止）の有無、ある場合にはさらに吸気の有無によって下位分類する。川上氏の「句」は、このうちの「音調的切れ目のみ」のものを含むもっとも細分化された単

位である。「語」や「アクセント単位」は、音声面では単一の境界特徴によっては定義できないまとまりであるのに対し、「句」は、ピッチの上昇に向かうための「中音」にピッチがリセットされる、というのが川上氏の見解である。この句の中音からのピッチ上昇が「句音調」で、デフォルトの「並上がり句音調」は、第1モーラに核がある場合はこのモーラ内部、そうでなければ第1モーラから第2モーラへのピッチ上昇として定義され、これより早い上昇が「早上がり句音調」、遅い上昇が「遅上がり句音調」である。基本的に開始部のピッチ変動の特徴によって観察可能なまとまり、ということになる。

これ以外に「句」を特徴付けるような音声的特徴がないかを、川上氏が触れていないピッチ以外の面、句の終端部、句音調の順に見ていく。

まず、ピッチ以外の特徴として、リズムを考えてみる。日本語は、拍を単位とする均一なリズムが無標であることはよく知られる。このリズムは各発話ごとにつねに一定だろうか。

(28) a. {メ}{ド}ーシタ}=ノ 「目、どうしたの？」

b. {ヒダリアシ}{ド}ーシタ}=ノ 「左足どうしたの？」

28a と 28b の「どうしたの」を同じ速さで発音した場合、「目」と「左足」の一拍のリズムは同じとは思えない。「目」のほうは、仮に読点で表記したポーズも関与して、「左足」と比べて一拍がかなり長くなるように感じられる。そもそも、このポーズがなぜはいるのだろうか。このような、拍の間隔がつくるリズムの変化が同一の発話中に現れる場合、その境界のもっとも有力な候補は句境界であると思われる。というのは、無標なリズムパターンをあえて崩すことによる際立てが、「すごい>すんごい」「ぜったい>ぜーったい」「ながい>ながーい」などしばしば見られるが、これらは通常はピッチによるプロミネンスや句頭のイントネーションと連動しているからである。句の境界はリズムを意識的に変動させることが容易な位置であると予想される。

(29) a. {マ]ダマダ}{ワカラ]ナイコト]ガア]ル} 「まだまだわからないことがある」

b. {マ]ダ}{ワカラ]ナイコト]ガア]ル} 「まだわからないことがある」

(30) a. {ワカラ]ナイコト]ガ}{マ]ダマダア]ル} 「わからないことがまだまだある」

b. {ワカラ]ナイコト]ガ}{マ]ダア]ル} 「わからないことがまだある」

29a-b の単独で句を構成する「まだまだ」と「まだ」の拍の間隔は、かなり自由に変えることができる。「まだまだ」と「まだ」をほぼ同じ長さで発音しても不自然ではない。これに対して、30a-b では「ある」の拍の間隔を変えないようにすると、「まだまだ」を短く発音しないほうが自然である。30a の「まだまだ」を短くしてかつ「ある」を長く保とう



とすると、次の「ある」の冒頭に句音調が加わって句が分割されやすい。同じことは、単語についてもいえる。

- (31) a. {モ}ト}{セ]ンム} 「元専務」  
b. {モ}ト}{トリシマリヤク} 「元取締役」  
(32) a. {ユ]カワセ]ンム} 「湯川専務」  
b. {ユ]カワトリシマリヤク} 「湯川取締役」

31a-b では、「元」の長さを固定しても、「専務」と「取締役」の長さは可変であるが、32a-b では「湯川」の長さを同じに保つと必ず「取締役」のほうが長い。この場合も、32aの「専務」を「湯川」より長い間隔で発音しようとする、セに句音調が加わり二句になってしまう。

つまり、句の内部には「音調の切れ目」がないだけでなく、「リズムの切れ目」もあってはならないのだと考えられる。

「リズムの切れ目」は、しばしば句末拍にも現れる。この場合もやはり、しばしば「音調の切れ目」つまり句末のイントネーションとセットになっている。「文末イントネーション」はしばしば統語論上の「文」と結びつけて文の種類を変更するようなピッチ変位として記述されるが、これも、厳密に言えば韻律構造上の仕組みの一つであり、何らかの音韻階層の末尾に、これを構成するアクセント単位の種類とは関わりなく加わってくるピッチの変動パターンのセットであると考えられる。「尻上がりイントネーション」のように、文末以外の位置において現れるイントネーションもこれと同種であり、「文末」に限るのはおかしい。疑問文や平叙文などの区別にもこれらのイントネーションの区別が用いられるが、発話を言いよんだり中断する場合や、聞き手の注意を引くときに使われるものであっても、ピッチ変動の型として区分できる限りは同種のものと考えべきであろう。間投詞やいわゆる終助詞の多くは決まったアクセント型をもたず、専らイントネーションによるピッチ変動が実現する場となっていると考えられる。終助詞を伴わない場合には、アクセント単位の末尾（東京方言では最終拍全体）にこのようなイントネーションが加わる。しばしばこのイントネーションは呼気の中断やあるいはリズムを乱すような拍の延長を伴う。

このようなイントネーションは、句の末尾には自由に現れることができるが、句の内部には生じない。むしろ、句の内部で言いよどみなどのイントネーションが発生した場合にはそこで句が終わり、新たな句が開始されると考えるべきであろう。たとえば、数詞の桁と桁の間で言いよどむと、下の桁は新しい句を構成する。

- (33) a. {ニ]ジュ-}=-{ゴ}

b. {ジュー}=ー{ゴニ]ン}    cf. {ジューー}ゴニン}

c. {モ]ト}=ネー{モームス}

語の内部の句境界では通常はイントネーションを担う助詞が挿入されることはないが、しかし本来句の境界が置かれうる位置であれば、助詞を挿入することは不自然ではない。「エー」「アノ」などのフィラーも同様である。

句末イントネーションは、ひとつの韻律構造階層の境界マーカ（境界声調）であるとみなすことができる。Pierrehumbert & Beckman で Intonational Phrase(IP)と呼ばれる統語階層とは独立した階層である。ここではこれをイントネーション句と呼び、最低1個の音調句から成る上位の階層とみなす。音調句末尾に句末イントネーションが加わっていれば、次の音調句は新たなイントネーション句の最初の音調句ということになる。一個の音調句が二句に分割されないままで二つのイントネーション句に分かれることはない。

最後に、川上氏が東京方言における句頭イントネーションのひとつとして挙げる、遅上がり句音調について問題を提起する。句音調の遅延はどこまで許容されるのか、複数のアクセント単位から成る音調句で、句頭からの上昇はアクセント単位の境界を越えうるのか、という問題である。川上(1956)の挙げている例<sup>4)</sup>は、基本的に有核型ではじまるものに限られており、2アクセント単位以上の例でも上昇は最初のアクセント単位の核で止まってしまう。さらに遅れても核の位置をずらすだけで、次のアクセント単位まで上昇するものかどうかわからない。また、無核型の場合、どこで上昇がとまるのかが不明である。

実はこれは、句階層をどうみるかの問題としても重要である。これまであげた例については、句が無核で下降しない場合であろうと有核で *catathesis* がある場合であろうと関係なく、共通に観察される「句」の特徴であった。したがって、Pierrehumbert & Beckman のように、中間句とアクセント句を区別する必然性はないものばかりであった。しかし、遅上がり句音調が平板型のアクセント単位連続の場合のみアクセント単位の境界を超えての句音調の実現を許すとすれば、「アクセント句」を仮定する可能性が出てくることになるわけである。

川上氏が有核型を例に挙げている「遅上がり」とは異なるものである可能性があるが、句音調の上昇が実際にアクセント単位の境界を越えて続く場合は、確かにある。

(34) a. {マジメナガクセーダ}                      「まじめな学生だ」

b. {マジメナヒト]ダ}                              「まじめな人だ」

c. {マジメナセンセー]ダ}                        「まじめな先生だ」

34a-c は、並上がり句音調では2モーラ目のジでピークに到達する。「私は」などを主語

とする通常の陳述の句頭イントネーションである。しかし、他人の評価として感嘆した調子で発する場合には、低いピッチからはじまり、ピークは二つ目のアクセント句の核の位置となる。核のない 34a では、句最終拍であるダまで上昇が続くことになる。

- (35) a. {フマ]ジメナガクセーダ} 「ふまじめな学生だ」  
 b. {フマ]ジメナヒト]ダ} 「ふまじめな人だ」  
 c. {フマ]ジメナセンセー]ダ} 「ふまじめな先生だ」

これに対して、前分が有核型のアクセント単位でも同様な陳述タイプと感嘆タイプの2種が可能であるが、これは前分の核(マ]のピークが高いか(陳述タイプ)、後分の核または無核のときの句末が高いか(感嘆タイプ)の区別となる。二句構造で後分が遅上がり句音調になっている、という分析がより妥当とも見える音調である。郡(1997b)が「しみじみ調」と名づけたものも同じ現象であろうが、アクセントが弱まらない例として分析されている。しかし、この構造の面白いところは、意味の点では名詞限定修飾関係という、典型的な句統合を起こす構成で、また「人」のアクセント型が無核のヒトではなく有核のヒト]という、専ら非句頭位置で限定修飾語があるときにのみ現れる形になっている点である。また、「いい転機だ」のような通常は二句構造の陳述は、いくらしみじみ言ったところで「いい天気だ」と同じにはならない。なるとすれば「転機」より「いい」にしみじみしている場合だろう。34 との平行性を考えると、少なくともこの感嘆文では全体が一つの句に統合しており、句音調が最初の核を越えて句の最後の核を迎えるまで句全体にわたって上昇する、という分析が適当だと考える。平板・有核を問わず、ある種の構文でピッチが徐々に上昇する領域、としての「句」を定義することもできるわけである。鹿児島方言では、これに対応する構文ではやはり下降をまたいでピッチが上昇を続け、プロミネンスがない限り句音調を担わない最後のダ]でピークに達する。

## § 5 まとめ

以上、川上泰氏の東京方言イントネーション記述をベースに、韻律構造階層としての音調句についての考え方を述べた。この階層は、基本的に鹿児島方言など九州の方言にも適用できる区分である。階層構造を図示する。

<図 2 >

イントネーション句 → 音調句 (+音調句・・) = 句末イントネーション

音調句 → アクセント単位 (+アクセント単位・・・) \* α

アクセント単位 → 語[+アクセント型] (+語/接辞[-アクセント型]) \* β

$\alpha$  : 音調の切れ目+句音調型 (±プロミネンス) 実現規則、リズムの切れ目

$\beta$  : アクセント型の実現規則

方言ごとに異なるのは、句末イントネーションの種類、句音調型とプロミネンスの実現規則、アクセント型の実現規則であり、韻律構造階層自体は変わらないと考える。Pierrehumbert & Beckman のような、catathesis の有無による階層区分をしないのは、ピッチ変動に大きく依存する韻律構造をもちピッチの上昇と下降を共に用いる日本語で、ピッチ下降のみを特別視する必要はないと考えるからである。プロミネンスにしてもピッチの上昇幅の問題であることを忘れて、無核型を中心にピッチの下げを含むプロミネンス付与が日本語でも頻繁にあることを見逃してしまう。学会発表等で、中国語のような音節声調言語やそもそもアクセントが低であることが多い現代インドの言語までプロミネンスを高ピッチと誤解したままで分析している場面を目にすることがあるので、この点は強調しておきたい。

方言ごとの構造記述の一例として、アクセント型の実現規則が単純な南九州の方言の基本的な句音調とアクセント型の実現の概略を挙げる。甲佐方言については湯川(2006)に最大で3種類が併記されている2語文データ(一部活用形データ)がかなりあるので参照されたい。二句へ分割、一句に統合、全体プロミネンスが加わりアクセント単位が融合しているものと解釈する。鹿児島市方言については児玉(2005)と解釈が少し変わっている。この点と出水市方言については稿を改めて論じる。宮崎市方言は、予備的な調査による推論である。全体プロミネンスによるアクセント単位融合がどのような単位まで可能かは方言ごとに変異がある部分であろうと思う。

<図3>

凡例 H: 高平音節 F: 下降音節 L: 低平音節

[ : 音節間上昇 ] : 平進に続く音節間下降

| : アクセント単位境界 { : 句頭 } : 句末

熊本県甲佐方言 :

$\alpha$  : (L){H.. (全体プロミネンス : =アクセント単位融合)

$\beta$  : ..]

出水市方言 :

$\alpha$  : {H.. (全体プロミネンス : =アクセント単位融合)

$\beta$  : A 型 ..F] B 型 ..]

鹿児島市方言 :

$\alpha$  : 句頭アクセント単位 A 型 {(L..)(H)F] B 型 {(L..)[H]

$\beta$  : A 型 ..F] B 型 ..]

宮崎市方言 :

$\alpha$  : 句頭アクセント単位 {(L..)[H]} (全体プロミネンス : =アクセント単位融合)

$\beta$  : ..]

注

- 1) たとえば Ishihara(2005)は、実験音声学的統計的方法で鹿児島方言の *Catathesis* は A 型に続く場合のほう B 型よりもやや下降幅が大きいと結論付ける。形容詞 B 型のデータでは B 型の例が「ヨカ]~」を用いているが、この形容詞は東京方言の「いい~」と同様、「悪い~」と対比される限定修飾用法以外の用法が広く、ピッチの二項対立が起きやすい。cf「いい大人」。平山輝男氏は鹿児島方言でアクセント単位融合が起りやすい特殊な形容詞としてヨカ]をあげている。このほかのデータでも、二項対立がすべて可能であるが、この区別は実験で考慮されていない。なお、この実験の結果でより興味深いのは、A 型と B 型の卓立音節前の低音節の音節数をそろえると、ピーク前のピッチ(IAB: Initial Accent Boost)が A 型のほうが有意に高いという点である。これはおそらく、最大ピークが句末になる B 型ではもっぱらピーク前のピッチ下降のみが卓立に関与する、ということを示唆している。
- 2) 川上(1957a)の「プロミネンス」という用語の説明では、この術語を用いた H.O.Coleman の「対比の目的に限られない」という説明を長く引用し、また関連する D.Jones の Contrast-Emphasis という術語も単に対比の用法が多いためについたもので対比のみに用いられるものではないという点を強調している。
- 3) 木之下(1957)で出水方言で二形アクセント複合語規則が随意的な「アクセント節統合」が詳しく述べられている。これらの中にはプロミネンス付与を条件とするものとそうでないものがある。この区別については稿を改めて論じる。
- 4) 川上(1956)では「文頭」のイントネーションとされているが、後に「句頭」と改められている。

## 参考文献

- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇) 東京: 明治書院. 347-390.
- 川上夔(1953)「「花高し」と「鼻高し」-東京アクセント段階観の限界」『音声学会会報』82: 6-9.

- 川上 蓁(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25:21-30.
- 川上 蓁(1957a)「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』7:21-30.
- 川上 蓁(1957b)「準アクセントについて」『国語研究』7:44-60.
- 川上 蓁(1961)「言葉の切れ目と音調」初出『国学院雑誌』62-5:67-75. [川上 蓁(1995:130-142)に再録のもののみを参照した。]
- 川上 蓁(1988)「日本語の音調と音勢(原題 ことばの旋律)」初出『日本語百科大事典』. [川上 蓁(1995:196-206)に再録のもののみを参照した。]
- 川上 蓁(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.
- 木之下 正雄(1957)「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」『国語学』15:70-80.
- 窪 蘭晴夫 (1997)「アクセント・イントネーション構造と文法」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.203-229.
- 郡 史郎 (1997a)「「当時の村山首相」の2つの意味と2つの読み:名詞句の意味構造とアクセント弱化について」『文法と音声』くろしお出版.123-146.
- 郡 史郎 (1997b)「日本語のイントネーション-型と機能-」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.169-202.
- 児 玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集4』281-307.
- 前川 喜久雄(2006)「イントネーション研究発展の要因」『音声研究』10-3.7-17.
- 湯川 恭敏(2006)『甲佐町方言調査報告』熊本大学言語学研究室
- Hayes, Bruce and Aditi Lahiri(1991) Bengali Intonational Phonology. In: *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 47-96.
- Ishihara, Shunichi (2005) “An acoustic-phonetic descriptive analysis of Kagoshima Japanese tonal phenomena”. Proceedings of the Symposium, Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena. ILCAA.
- Pierrehumbert, Janet & Beckman, M.E. (1988). *Japanese Tone Structure*. Linguistic Inquiry Monograph. Cambridge.

#### オンライン音声資料

三遊亭歌之介作／「酔払い」鹿児島方言古典落語のプロソディー解釈

<http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/prosody/yopparai.html>